

2024年12月25日（降誕日、C年）

牧師メッセージ

「わたしたちに自由を与えるため」

司祭ヨセフ太田信三

祈禱書の「賛美の歌」にこのような箇所があります。

「キリストよ、あなたは栄光の王、永遠にいます神の御子。わたしたちに自由を与えるため、人となられたとき、おとめの胎もいとわれなかった」

クリスマスとは、わたしたちを自由にするために神が起こした出来事です。わたしたちはあらゆる不自由さの中で生きています。たとえば、国籍、年齢、性別、あらゆる違いがわたしたちにはあります。「違い」とは本来、神が創造したこの世界がいかに豊かであるかを証するものです。しかし、人は互いの違いを認めあえず、豊かさをもたらさずはずの「違い」を、不自由なものへと変えてしまいます。往々にして、違いを認めあえないところには、自分を安全圏に置きたい心理や、違いを利用して自分の立場を守ろうとする、というものがあるのではないのでしょうか。こちらは優秀、あちらはだめ。理解し合うのは面倒だから、同じ価値観の人間だけで暮らそうじゃないか。そのためには、奴らは危険だ、邪魔だから排除しよう。そうして、両手に武器をもつのです。なんと不自由なのでしょう。

主イエスの誕生は、そんなわたしたちを自由にする出来事です。主イエスは、ルールからはみ出している、とされた人々のところに神の愛を届けて回りました。そればかりか、互いを裁かないと生きられない、不自由さががんじがらめになった人間の、その縄目もろとも十字架で滅ぼしてくださいました。主イエスはわたしたちを解放するためにこの世に来てくださったのです。わたしたちはイエス様が十字架にかかって、解放してくださったから、自由に生きることができます。しかしそのためには、降臨節のはじめに申し上げたように、冒険に出なければなりません。マリアやヨセフのように「信じる」冒険です。頑なに守っている殻を破り、違いが認められない心、疑いを離れて、「信じる」一步を踏み出す冒険です。疑いを超えて御告げを信じたマリアに、御子は宿りました。彼女の「信じる」という決断の先に、主イエスは誕生しました。信じる、それは神のみならず、他者を信じることです。それがヨセフの信仰です。未婚の妊婦、マリアを信じ、愛したのです。その決断の先に主イエスはお生まれになりました。

神を、そして相手を知るところに主イエスはお生まれになります。疑いを超えた先に、主イエスによってもたらされる自由な世界が広がっています。相手を、神を知ることができれば、わたしたちは武器を捨て、両手を開くことができます。それこそ、主イエスの十字架上の姿です。両手を開いて、神にすべてを明け渡している。すべての人にご自分のすべてを開かれている。あの姿こそが、わたしたちに自由を示す姿です。疑いではなく、信じることの先に、主イエスはお生まれになる。そこに広がる地平こそが、主イエスによってもたらされる自由な世界です。すべての命が互いに疑いを超え、交わっている神の国です。今日お生まれになった御子が、両手を開いて、そこにわたしたちを迎えてくださいます。